
特殊暗殺部隊第2班 セブン！

泪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特殊暗殺部隊第2班 セブン！

【Nコード】

N6812X

【作者名】

泪

【あらすじ】

無実の罪だが、殺人者と誤解され死刑執行を下された

いばらなな 棘那奈は、ひょんなことから暗殺部隊に入隊する。

しかし、その暗殺部隊は「絶対に人を殺さない」というところだった！

那奈にはどうしても復讐したい人物がいて、

那奈は暗殺部隊と一緒に復讐することに！

壹、死刑執行

「最期に何か言い残す事はありませんか？」スピーカー越しに聞こえる声。

あーあ、ついにこの時が来てしまった。最期に言い残す事？そんなの決まってるじゃないですか！

「わ・た・し・は・や・っ・て・ま・せ・ん！！！！」

思いつきり憎しみを込めて言ってやった。

「では、これより棘那奈こげんななの死刑を執行する。」

「あのー、私の話聞いてました？ 冤罪だって！あんたら、私を殺したら殺人者よ！？」

「五月蠅うるるい！死刑囚は、黙ってろ！」

スピーカー越しに聞こえるその声は、声を荒げた。

「棘那奈、19歳、女。 罪状、首相暗殺。先月16日に最高裁にて死刑判決。」

さっきとは違う声がスピーカーから聞こえた。

「絞首刑を執行いたします。」

その声は、淡々と言う。

「ちょ、ちよつと！やめてよ。マジでやるの？」

ずっと後ろで待機していた2人の男が私の視界を奪った。

縄が首に当たる感覚がした。

なぜだか死ぬことは、怖くなかった。

「死」に慣れているからだ、きっと。

あの事件の所為^{せい}で・・・。

19年間の思い出が走馬燈のように頭を駆け巡る。

ああ、もう終わるんだ。

その瞬間、足場が無くなった。

式、救出のち悲鳴

・・・。あれ？

私・・・生きてる・・・？・・・息出来るし、地面に足着いてる・・・。

そう思った瞬間、まわりから聞こえてくる声。

「お、お前ら何者だッ！？うッ・・・うわぁー」

「侵入者か！？ぐほッ・・・」

どうやらさっきの2人の男の声のようだ。

私は、視界が塞がれているので声で判断するしかなかった。

どさッ。人が倒れる音がした。

「なあーんだ、警察ってやっぱ弱いねえ。俺の出る幕じゃ無かったって感じい？」

聞き覚えの無い男の声。

「こらこら！姫ひめ、そんなこと言うんじゃないよ。ちゃんとしないと今回の報酬ないわよ！」

女の人の声も聞こえる。

「・・・ごめんなさい、でもちゃんとやったから！報酬はちょうだいねえ」

「よろしい。んじやとつとと帰るよ。・・・って姫、ちゃんと目隠し取ってあげなきゃ駄目じゃない！あーあ、可哀相に・・・。」

とんとんと、足音が近づく。少しして私の目隠しは外された。

広がる視界。

目の前にいる女の人と目が合う。体は細くて髪は肩までの艶のあるストレート。とても美人だ。

「やあ〜かわいいッ！ 貴女が棘那奈ちゃん？ 無事でよかったわあ。」

「あの・・・、貴女が助けて下さったんですか？ なんで私を？ 貴女は？」

目の前の美人さんは、にっこり笑いながら言った。

「私は、表の警察官ちょっと眠らせてきただけよ。貴女を助けたのは、あのでかいやつ！」

美人さんは、顔はそのままに右手の親指で後ろにいる長身の男の人を指さした。

私は、指さされた方に目をやる。

そこには、整った顔、185？はあるだろう長身、細めだけど筋肉はしっかりついている男の人が立っていた。

「初めまして、棘那奈様。特殊暗殺部隊第2班、隊長の壱井白雪いちいしらゆきです。

以後、お見知りおきを。」

そう言っ彼は、お辞儀をした。

「は、はい。あの、お二人とも本当にありがとうございました。おかげで助かりました。」

私、濡れ衣着さされてて……。命の恩人です。」

私も頭を下げた。

・・・ちよつと待てよ？ アンサツ？

「暗殺部隊・・・?! 警察に変わって私を殺しに来たとか・・・？」

駄目だ、テンパって、私。この人たち命の恩人だよ？

「はははっ、那奈様、面白いですね。私達は、あなた様を助ける、という命令でこちらに來ただけでございます。貴女を助けに來たのですよ。」

呆れられてる。恥ずかしい・・・。

「すみません。でも、本当に助かりました。私、帰ります・・・。ありがとうございました。」

確かこの刑務所は家から遠くない。さっさと帰ろう。

「・・・帰る？ 那奈ちゃん、何言ってんの。私らと一緒に來るんだよ?。」

ずっと黙っていた美人さんが当たり前のように言った。

「へ？」

「まあ、詳しくはアジトで。私先帰るわ。私、お邪魔みたいだし・・・
後、姫、頼んだよ。」

「はい。」

「んじゃ、那奈ちゃん。また後でね！」

「・・・？は、はい。」

美人さんの言っている事が理解出来なかったが、話は進んでく。

私は、混乱で返事するので精一杯だった。

美人さんはそそくさと帰って行った。

「・・・ああ、敬語ってしんどっ。」

そう言って彼は、私の前まで来てにドサリと座り込む。

「え？」

思わず、出てしまった声。この人・・・さっきと全然違う。

「あの・・・い、壺井さんでしたよね？ 失礼ですけど、さっきと全然キャラが違うんですけど。」

「姫、でいーよ。みんなそう呼んでっから。俺も那奈って呼ぶし。俺さあ、敬語とかそういう、かたっ苦しいの嫌いなのお。」

「え、？」

明らかに違いすぎる。私は、状況に付いていけない。

ちゅ。

んっ？ 何か唇にあったかいものが・・・。

そう思ったときには、もう遅かった。

「那奈があんまり可愛いからキスしちゃったあ。あれ、那奈顔まっ・・・いたっ。」

思わず彼のほっぺを平手で叩いた。

き・・・キスだとおおお！

「やめてくださいっ！！！！ 何やってるんですか！！！！ 見損ないましたよッ。」

私は、動揺を隠せなかった。 顔が紅あかいのが分かる。

「命の恩人へのお礼だと思ってえ。」

にやにやして彼は言う。

「サイテーっ!!!」

まさか、こんな人だったとは・・・。

「さっ、もうちょい2人でいたかったけど。みんな待ってるし、アジトへいこっか。」

そう言って彼は、私を抱き上げる。

また、顔が紅くなる。

「ひゃっ、降ろしてください！ 家に帰りますーっ、離してー!!！」

「那奈、暴れないで！ ちゃんと捕まってるよ!?!」

「いーやーだー！」

警察官たちが気を失っている静まりかえった刑務所の中、私の悲鳴に近い叫び声が響き渡った。

式点伍、思い出す、あの人を。　　＼那奈side＼

突如、現れ私の命を救ってくれた貴男。

私は、なぜか彼等のアジトへ行くことになった。

私は今、貴男に「お姫様だっこ」されている。

アジトへと向かう途中。

刑務所から離れて間もないが、私達は木の生い茂る森の中にいた。

道とも言えないような、ただ木が生い茂るその中を貴男は器用に木の合間をぬって進む。

私の家の逆にあたるので、私は今までこんな森があることを知らなかった。

「あの、私、重くないですか？」

さつきから気になっていることを貴男に言う。

すると、貴男は。

「那奈、五月蠅い。」

一言しか、言っていないのに。

「ホントに降ろして下さい！ 私、歩けますから！」

強めに私は、言い放ったが

「那奈をアジトまで無事に届けるのが俺の役目だし。
ニーナから頼まれたしなあ。」

貴男には届かなかった。

「ニーナさん？ さっきの美人さんですか？」

私は、降りることをあきらめ、おとな温和しくした。

「ははっ、美人さんかあ。確かにニーナ可愛いよねえ。
それ、ニーナに言っただけな、喜ぶよ。」

貴男は、笑いながら言った。

「そんなことよりさ、那奈。ごめんね、いきなりキスしちゃって。」

「え？」 思わず貴男の顔を見てしまった。

色白で、鼻が高くて、切れ長の目、艶のある真っ赤な唇。

本当に整った顔だなあ、私は少しのあいだ見とれていた。

「女の子にとったらさ、キスってそんな軽い行動じゃ無いんだよね？
好きな人とするのが理想ってゆーか。初めて会った人とやるのは、
おかしいよね？」

もっと軽い人だと思ってた。そんなことを考えてくれてたんだ。
でも、

「当たり前じゃないですか。女の子にとったら「キス」は大切なものなんですよ。
分かってるんなら、やめてくださいよ。」

「ごめん、でも可愛かったから・・・。」

「ひ、姫。言ってること無茶苦茶ですよ。」

「あ、初めて名前呼んでくれたね。うれしーいっ!」

「あ、私の話無視したっ。」

「無視してないよーっ。って那奈、ファーストキスだった?」

ぎくっ。

思わず顔が強張る^{こわば}。

「う、うん。」

少しだけ照れながら答える私。

「そっかあ、本当にごめんね。」

哀しそうな顔でそっと呟く貴男。

・・・なんでそんな顔するんですか？

なぜかもやもやする私の心。

この気持ちはなんだろう・・・？

もしかして、恋なのだろうか？

いや、それとも・・・

貴男が私の兄に似ているからなのだろうか？

貴男を見ていると、私は兄を思い出す。

なぜだろう。

私の心と頭は、もやもやで埋め尽くされていた。

式点伍、緑を駈（か）ける騎士〜白雪side〜

「後、もう少しでこの森を抜ける。そしたら、アジトが見えてくるから。」

俺の腕の中で温和おとなしくしている那奈に言う。

「分かりました・・・。」

小さな声で返事が返ってくる。

その後、俺たちは森を抜けるまでなぜかお互い一言も会話をしなかった。

森の中は、常に景色は一緒。

緑しか無い。

静まりかえる森の中、

俺は、5年前の事を思い出していた。

それは、俺が15だった時のこと。俺は当時、陸軍にいた。

陸軍の本拠地、ウグイレナ諸島。

そこは、面積が広い。しかし、その多くは森で俺ら兵士以外誰もいなかった。

面積が広いため、各国から領地として狙われ、いつも戦争が起こっていた。

いままで何人もの兵士が闘い、傷つき、死んでいった。

島のまん中にある大きな広場。

なぜかここだけ、緑が少なく、大きな円状の野原となっていた。

戦の前夜、そこでは兵士が集まり、酒を飲み、明日からの戦に備えていた。

俺は、一人になりたくてみんなと離れ、一人酒を飲んでいた。

ふいに、後ろから声をかけられる。

『白雪。』

声に反応し、後ろを向いた。背が高く、細い男が立っていた。

俺と一緒にの時期に入隊した、キャロル・ナイトだった。

ナイトは、俺よりひとつ年上だったが、入隊の時期が近かったのですぐ仲良くなった。

今では、軍の中で一番仲がいい。

ナイトは、俺の横まで歩いてきて止まった。

『ナイトか、どうした？』

『白雪と飲みたくてね。もう二度と一緒に飲めないかもしれないじゃん。』

ナイトは、整った西洋人顔を少し歪め言った。

俺は、その言葉をすぐに否定した。

『そんな事言うな。みんな生きて帰ってくるんだ。また一緒に酒飲むんだよ。』

『そうだよね……。ごめん。俺、死ぬの怖くて。兵士だから死ぬのなんか当たり前なのに。』

『死なんて誰だって怖いよ。俺らは兵士の前に人間なんだから。』

俺は、自分の意思で陸軍に入ったが、もちろん死ぬ事が怖くないわけが無い。

いつも隣り合わせの「死」。

『あのさ、白雪。こんな事考えたくないんだけど……。』

ナイトが深刻な顔で呟く。

『うん？』

『俺に、俺に万が一の事があつたら・・・、妹に「守れなくてごめん」って伝えてくれ。』

『は？万が一ってなんだよ？俺らは、何があっても生きるんだよ！』

声を荒げ、ナイトの胸ぐらを掴んだ。

『頼む。』

ナイトは、それだけ言う俺の手を掴み、胸ぐらから離れた。

そして、俺から離れ行ってしまった。

『おいっ！ ナイトっ！ 待てよ！』

俺は、ナイトを追いかける。

すぐにナイトに追いつき、肩に手を掛ける。

ナイトが顔だけこちらに向け、小さく微笑んだ。

俺は、すぐに肩から手を離れた。

ナイトの表情がそうさせたのだった。

ナイトは、すぐに顔を前に向け、足早に闇夜に消えていった。

俺は、それ以上ナイトを追いかけなかった。

次の日。

俺とナイトは、それぞれ違う班で戦った。

相手は、人数も多く、俺らはかなり追い込まれた。

でもみんな、必死に戦った。

何とか、勝つことができたが多くの犠牲が生まれた。

その犠牲の中に、ナイトも入っていたことを知ったのは、

戦が終わって少ししてからのことだった。

涙が涸^かれるまで泣いた。

そして、彼と最期に交わした言葉を思い出す。

『妹に「守れなくてごめん」って伝えてくれ』

あいつ、妹いたんだ。正直、初耳だった。

でも、

その日から、俺はナイトの妹をずっと捜していた。

彼との約束を果たすために。

戦争なんかの所為^{せい}で死んでいったあいつの為に。

初めて那奈を見たとき、確信した。

彼女が、ナイトの妹だということを。

でも、言い出すタイミングが見つからない。

彼女は、多分ナイトが死んだことを知らない。

兄が死んだ事を知ったらどうなるか。

しばらくは、俺はこの事を那奈に言えそうにない。

参之壱、特殊暗殺部隊第2班

森を抜けた。大きな野原が広がっていた。

久しぶりに感じる太陽光。

私は、思わず目を細めた。

そんな私をよそ目に姫は、言う。

「那奈！お疲れ様。あそこに見えるのが俺らのアジトだよお。」

姫は、少し先にある大きな白い建物を指さしながらにこにこ笑った。

「あれが・・・、アジト？　ってでかいですね！　パツと見、普通の家だし。」

私は、姫に思った事をそのままに伝えた。そして続ける。

「私、アジトっていうからてっきり、もっと小さくて黒いのかと・・・。」

「小さくて、黒い？　俺らんとこと真逆じゃん、それ。」

ははっ、と笑いながら姫は私に言った。

「そんなおっかないところじゃないよ、俺らのアジトは。」

「・・・見る限り、そうですね。」

私は、苦笑いして答えた。

私達は、そんな会話をしながらアジトへ向かっていった。

アジトを目の前になると尚更大きいと感じる。

私達は、アジトの入り口にあたるであろう扉の前にいた。

突然、姫がズボンのポケットから懐中時計を取り出し、時間を確認する。

（貴男は、アリスに出てくるウサギさんですか。）

思わず突っ込みたくなったが胸の中でだけにしておいた。

「32分。かかり過ぎたなあ。」

ぶつぶつと時計相手に呟く姫。

「どうしたんですか？ぶつぶつぶつぶつ、気持ち悪いですよ。」

「んなっ！　おい、那奈。命の恩人に「気持ち悪い」は、ないだろ！」

そう言い、きつ、と私を軽く睨む。

「すみません、言い過ぎました。」

貴男とニーナさんが来てくれなきゃ私は死んでましたよ。で、32

分がなんたらかんたらって？」

「うん、わかってんならいい。あのね、俺らは25分以内にあの森を抜けなきゃいけないの。あの森は、普通なら抜けるのに2時間はかかる。」

姫が懐中時計をポケットに直す。

「にっ、2時間!？」

「迅速に、安全に、指令をクリアしなきゃいけないんだ。」

「32分ってだいたい早いんじゃない?。」

「25分以内がルールだからねえ。」

私には、その差は、いまいち分からなかったが、それ以上深くは考えなかった。

「なんか、安全って暗殺部隊って感じじゃないですね。」

少し笑いながら私は言った。

「俺らは、「特殊」なんだよ。」

姫は、微笑みながら私に言った。

参之巻、特殊暗殺部隊第2班（後書き）

↓参之弐に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6812x/>

特殊暗殺部隊第2班 セブン！

2011年10月31日15時24分発行